

大岩三区の歴史を歩いてみよう

【犀の河原の六地蔵】（舞々木橋北）

富士見小学校校歌の2番に「賽の河原（さいのかわら）の六地蔵（じぞう）」という歌詞が出てきます。「賽の河原」とは「死んだ子供が行く所といわれる三途（さんず）の川の河原。ここで子供は父母の供養のために小石を積み上げて塔を作ろうとするが、絶えず鬼にくずされる。そこへ地蔵菩薩が現れて子供を救う」という言い伝えがあります。



この場所は、大岩・万野・舞々木の境目であり、「さいの河原」という意味があります。昔から村と村の境は「塞（さい）の神」をまつり、隣の村から疫病（えきびょう）が入ってくるのを防ぐという願いを持ち、道祖神をつくったりしてきました。

なぜ、6つもお地蔵様があるのでしょうか。人の生まれ変わる行き先には6つの道、1)天道 2)人間道 3)修羅道 4)畜生道 5)餓鬼道 6)地獄道があり、「六道」といわれています。この行き先は、人間である時の行い次第で決まります。よい行いをする「天道」へいけますが、けんかばかりしていると「修羅道」に落ち、生き物をいじめると「畜生道」へ、食べ物を粗末にすると「餓鬼道」へ落ちるといった具合です。六地蔵は、それぞれの道の守り神としてまつられているので6体あるのです。



ここには、お地蔵様だけでなく、富士山に登ることが修行と考えられていたころ建てられた供養塔（くようとう）もあります。今の登山道が作られる前は、ここを通過して村山の浅間神社でお祓いを受けてたくさんの方が富士山に登っていたのです。

昔、富士山の頂上を極楽浄土（ごくらくじょうど）と考え、そこに登ることで、御利益（ごりやく）があるとされてきました。その際、犀の河原を地獄（じごく）と考え、そこから富士山頂上の極楽浄土へいくという考え方でこの地を通ることが大変意味を持っていたと考えられます。



【馬頭観音】（ばとうかんのん）

むかし、農家にとって馬は、家族同様に大切にしていました。馬が亡くなった時には、その供養のために馬頭観音を建てたと考えられます。馬頭観音の頭上に馬の頭があります。家畜や荷物を運ぶ馬の守り神として道ばたの石仏にも多く見られます。

大岩三区には、馬頭観音が5体ほどあり、馬とのかかわりが深かったことが分かります。

【青面金剛】（しょうめんこんごう）

人間の体内には三尸（さんし）という3種類の虫が棲み、人の睡眠中にその人の行いをすべて天帝に報告に行くという言い伝えがあります。そのため、三尸が活動するとされる庚申の日（60日に一度）の夜は、眠ってはならないとされ、庚申の日の夜は人々が集まって、徹夜で過ごしたそうです。

この風習は平安貴族の間に始まり、近世に入っては、近隣の庚申講の人々が集まって夜通し酒宴を行うことが民間にも広まりました。

一般には、足元に邪鬼を踏みつけ、六本の手で法輪・弓・矢・劍・錫杖・ショケラ（人間）を持つ怒った顔で描かれています。頭髪の間で蛇がとぐろを巻いていたり、手や足に巻き付いている場合もあります。また、どくろを首や胸に掛けた像も見られる。彩色される時は、その名の通り青い肌に塗られます。この青は、釈迦の前世に関係しているとされています。

「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿像と共に青面金剛像が表されています。例が多くあります。重林寺境内と時田（カット勝下の道沿い）にあります。



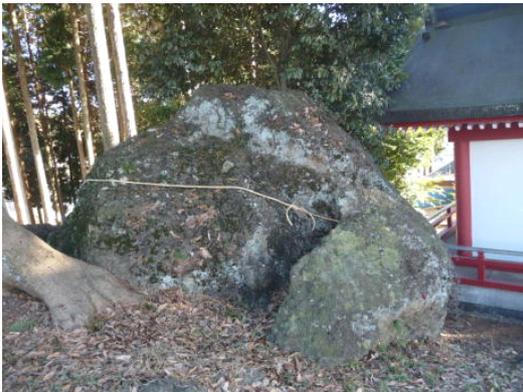


【道祖神】

道祖神は、昔の集落と集落の境に作られ、疫病や災いがよそから入ってくるのを防いでくれる塞の神（さいのかみ）として、人々から信仰されてきました。昔は、病を軽くするための祭りの一つとして「おぼっこ」といって赤飯のおにぎりを子どもに配る習慣がありました。

また、道祖神は、男女の神が一对でほられていることが多く、夫婦円満や縁結びの神様としても信仰されてきたことが分かります。

かつては、どんど焼きはほとんどが道祖神のところで行われていました。昔は、火の中に入れ、その神の力を回復させようとした例もあります。このようにどんど焼きと道祖神とは切っても切れない深いつながりがあったことが伺われます。



【大岩の子安神社】

子安神社には、この地域の名前の由来にもなった「大岩」をご神体としてまつてあります。生まれてくる子どもの安産を祈願する「子安信仰」は昭和の初めの頃まで、この地域でも盛んに行われ、杉田や栗倉にも「子安さん」があります。ちなみにこの大岩は古い記録を見ると、犬飼大明神とあって女性だそうです。

これに対して上小泉の八幡神社には、愛鷹大明神とあって男性の岩がまつてあったという記録があり、かぐや姫のお父さんとお母さんをセットでまつたと考えられます。

また、ここには「学問の神様」といわれる菅原道真をまつた天神様もあります。天神様はもとは、雷などの自然災害を鎮めることを願って建てられましたが、次第に菅原道真の優れた才能にちなんで「学問の神」としての信仰に変わっていったと言われています。